時を識る者

狼少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時を識る者

【Ｎコード】
Ｎ４２５３Ｕ

【作者名】
狼少年

【あらすじ】
ある日、一人の少年が視た夢。それは彼の運命の歯車を大きく変えた。彼はその広い世界で何を知るのか、【『世界』の真実】を知った時何を思うのか、少年因幡（いなば）　悠（ゆう）の壮大な旅が、今、始まる・・・。

プロローグ（前書き）

初投稿です！！
駄文でごめんなさい！

プロローグ

夢を見ていた・・・。そこは見知った様な町並み、行き交う人々や車、そこに俺は居た。

世界は灰色に包まれていた。だからだろう、これは夢である、とハッキリと言える。

瞬間、世界が色を取り戻す。人々の顔が驚愕に染まる。

歩行者用の信号機は赤だった。だが、一人の子供が道路に飛び出していた。

周りに目を向けると、そこには既にトラックが突っ込んで来ていた。居眠り運転だろうか、スピードが落ちる気配は無い。

俺は子供を助けようと動こうとしたが、地面に足が縫い付けられたかの様に、動かなかった。

…そして、子供は・・・。

ドンッ

そこで、俺は夢から覚めた。

プロローグ2（前書き）

前が短すぎたので、頑張りました！っていうかプロローグが異様に長い（汗）

プロローグ2

「いや、ねぇよ」

俺は起きた第一声がそれだった。それはそうだろう。俺も行き成り厨二全開の夢を見るとは、思わない。

「俺が、厨二で、オタクで、変態なのは認めるが・・・って変態を認めたら駄目だろ！」

「……」

「何が悲しくて、一人で漫才を繰り広げなければならないのか・・・」

うん、風呂に入ってサッパリとしよう。寝汗べったりだから、バカな事をしてしまうんだ。

服や下着類を持って、俺は下に降りた。

ザーッ、キュッ、ガチャ

「ふぃー、さっぱりした」
ゴシゴシと置いてあったタオルで身体を丁寧に拭く。そして、傍に畳んで置いた衣類を手に取――――

「悠ちゃーん！おっはよー！！」

――――れなかった。天才で弟バカな姉貴が突然乱入してきた挙げ句、手品師もビックリな早業で俺の衣類を横取りしたからだ。

ん？悠ちゃんって誰って？…そういえば自己紹介してなかったな。とりあえず簡潔に述べよう。

俺の名前は因幡（いなば）　悠（ゆう）、バカ姉貴（それ）は因幡　　麗《いなば　　れい》。

姉貴は、容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀、と三拍子が揃った、一言で言えば凄い人だ。

（・・・『アレ』が無ければな。）

そう思いつつ後ろを向く。〔後ろを向いてるのは、大事な所を見られない様にする為〕

「…ハアハア…悠ちゃんの匂い…クンカクンカ…スーハー…スーハースー…ハアハア…ゆ、悠ちゃんの味……ペロペロハムハム…ハアハア」

変態がいた。

そうなのだ、姉貴はショタコンで、しかも重度のブラコンなのだ。

・・・とりあえず、服新しいの出さねーとな。・・・変態(コレ)を止めてから。

「…姉貴」

「…ハムハム…ん？ひゅうひゃん？ほーひはほ？…はっ！ひゃっほほへぇひゃんひょほひょひょはひゃっひぇふへはんはへ！？ひゃあほへぇひゃんひょひゅへひほひほんへほひへ！！」

こっちを向いた姉貴は俺のパンツを銜(くわ)え…いや、食べながら何事かを言っている。

何を言いたいのかは何と無く判ったが、人のパンツを咀嚼しながら話すのは止めて欲しい。

「どうしたはこっちの台詞だよ。一体何の用さ」

「うん、お姉ちゃんね。悠ちゃんを襲…起こそうと思って、部屋に行ったら居なくてね」

（襲…って何だ！？）

「それで、シャワー浴びてるみたいだったから…」

「…から？」

何だろう、嫌な予感しかしない。

「コレ、持って来てあげたの（はぁと）」

渡された紙袋の中身を意を決して見てみる。そこにあったのは…、服だった。そう服…、それだけなら問題無いだろう。それが男性用ならば（・・・・・・・・・）…。

そこにあったのは、女性用の衣類だった。

「ヤッパリかーーーーっ！？」

「命ちゃんにお願いしたら、快く貸してくれたよ！ささ、悠ちゃん。早く着てくれると、お姉ちゃん嬉しいな～」

「誰が着るか！？」

バカ姉貴が執拗までに着せたがるのは、やはり俺が女顔なのと背が低く身長が、百四、五十ｃｍしか無いのが原因だろう。…多分。

「ンも～、照れちゃって可愛いな～も～」

「誰だって照れるわ！？って抱き着くな！！頬擦りをするな～！！！」

（くっ、拉致があかない）

そんな事を思っていた時だった。

ピンポーン！

「ゆーうー！起きてるー！？」

どうやら、女神様は俺を見捨てて無かったらしい。

「とりあえず、姉貴？そろそろ学校の時間だし、命も来たから」
「む～っ、バッドタイミングだよ命ちゃん…。悠ちゃん！これで勝ったと思わないでね！！」
トタタと何処かへ走り去った。…俺の服と共に。
「…新しいの出すか」
「ゆ～～う～～！！！」
「起きてるから少し待ってろ！！！」

とりあえず、服を着て、適当に身嗜みを整え、三十秒置きに聞こえる呼び出しに応える。
「ゆ～～～～」
ガチャ、バンッ！
「るっせぇよ！そんな叫ばなくても聞こえるっつーの！！ったく……」

「遅い！っていうか、何時もはコレでも起きないじゃない！いっつも遅刻ギリギリまで寝てるんだから。それで、『何で起こしてくれなかったんだー！』なんていちゃもんつけて来るんだから…」

「そ、そんなこと、有ったっけなぁ～なんて…」

「……」（ギロッ）

「すんませんでしたー！！」ｏｒｚ

余りの情けなさに全世界の俺が泣いた…。

今目の前でプリプリと怒ってる彼女は、稲葉　命《いなば　みこと》という名前だ。

朱みがかった腰まである長い髪に、クリッとしたスカイブルーの瞳、そしてその高い身長も相まって、確実に美人で可愛いの部類に入るレヴェルの高さだ。

家はお隣りさんで、彼女の母親がなんかのハーフで（忘れた）、モデルの仕事かなんかで日本に来ていた時に、命の父親に出会い一目惚れしたそうだ。

で、イナバという苗字から何と無く察しが付くかもしれんが、小さい頃から良く恋人だの夫婦だのからかわれてきたが…まぁ、おいおい話そう。

「…7時か、命？まだ時間が在るから、家で飯食って行かねぇか？」

「ん？う～ん、そうだねまだ時間が在るならそうしよっか。…ん？

7時？8時じゃなくて？」

「お前はこの腕時計の針が8時を指している様に見えるのか？」

「…遅れ「てるわきゃねぇだろ。電波時計だぞ、コレ。詰まり、お前の時計が早過ぎるだけだ」…にゃぁぁ」

「とりあえず命ほっといて飯食うか」

打ちのめされている命置いて、ご飯を食べに行った。

30分後

「…んじゃ、行って来るよ姉貴。母さんによろしく」

「悠ちゃん気をつけてね？なんか嫌な予感がするから」

「は、ハハハ大丈夫だよ。…多分」

「でも、お茶碗やお箸が…」

そう、実は食事中お椀と箸が真ん中から真っ二つになってしまったのだ。

流石に箸が二本から四本になるとは、誰だって思わない。

「じ、じゃあそろそろ行かないと遅刻するから」

「う、うん・・・」

こうして、俺と命は自宅から出発した訳だが・・・。

・　　・　・　・　・

バサバサッ！ギャアギャア

「た、大量のカラスが俺を睨みつけながら飛んでいった！？」

ニャ～、ニャーニャー

「黒猫の親子が俺をチラ見しながら俺の前を横切ってきた！！？」

ズルッボチャン！ぐちゃ

「そして今度は溝・・・の中にウ〇コが！！！？」

「だ、駄目だこのままでは体が持たん・・・、とりあえずそこの自販機で飲み物を・・・」

ビュウッ！ヒュ～

「タイミングが良すぎる位突風が吹いて英世さんが！！！！！？英世さ～ん！！カムバーック！！！」

そんなこんなで、少し大きめの交差点に差し掛かっていた。

この辺りは、店が多く立ち並んでいて人通りが多く、国道が近い為か車の通りもそこそこある。

周りが喧騒に包まれる中、俺はこの世の絶望を体言したかのように、横断歩道の前に座り込んでいた。

因みに衣類等は、その辺で買った物を着て、着ていた物は纏めてクリーニングに出した。

・・・流石に、泥や煤や鳥の〇んにまみれた服で学校に行くわけにはいかない。・・・その辺の事情はちゃんと説明するしか無いだろう。・・・鬱だ。

「あはは・・・。悠大丈夫？またアレなのかな？」

「・・・多分な。・・・死にたい」

あの連続した出来事に、流石の命も心配したのか、声を掛けて来た。

そして、俺の返答に苦笑いしていた。

「あはは・・・」

気になった人も居るかもしれない。『アレ』についても話しておこう。

『アレ』とはズバリ、俺の不幸である。これは、生れつき持つ『体質』であり、『不幸体質』などというふざけたモノが俺に在る。

この『体質』の所為で、不良に理不尽な因縁を付けられたり、大きな池の在る公園に行った時、『偶(たまたま)』腐っていた柵に寄り掛かり池にボチャンなんて、記憶に新しい。

一番ヤバかったのは、海水浴場へ海水浴に行った時である。何とサメが現れたのである。あの時程、自分の体質を怨んだ事は無かった。ジョ〇ジもビックリである。

その時は、姉貴がどっから持ち出したのか、ターボジェット付きボートなるものでサメを倒した。この時、家の姉貴はつくづく規格外だと思った。

話は戻るが、実は海水浴の時も今日と似たような事が、起こったのである。所謂、虫の知らせというモノであろう。そして、それは当たった。

命は、その時と同じ様な事が起きるのでは無いかと、心配なのだろう。あの時は偶然助かったが、今度も同じとは限らないのだ。

・・・しかし俺は、その『事』に心当たりが在った。朝、起きた時に見た『夢』。

・・・そして、『それ』は起きた―――。

キキイィィィ！！！！！！

ドンッ！！！

――――そして、紅色に染め上げられた俺の視界が最後に見たモノは・・・、

――――泣いている命の姿だった。

プロローグ2（後書き）

とりあえず、プロローグは3で終わる様にします！
次話は三日以内には投稿したいと思います！
感想も待っています。
では、次回もお楽しみ下さい！

プロローグ3（前書き）

遅くなってスミマセンm（　）m

プロローグ3

「・・・此処は」

俺は気が付けば空中を漂っていた。何故だか頭がズキズキと痛む。

上を向けば、青い空が。下を向けば、耳障りなまでの喧騒に包まれている。

俺は、その喧騒の中心に居る者を見たとき、俺は自身の目を疑った。

何故ならそこに居たのは、俺自身だったのだから。

「おや？気が付きましたか」

パニックに陥り掛けた時、声が聞こえた。俺はその声が聞こえた方を向く。

パニックに陥り掛けた頭は急速に冷えた。寧ろ、冷めすぎなのかも知れないが。

そこに居たのは、一言で言うなれば胡散臭い。そんな風貌の青年だった。

ぶっちゃければ、ネギま！のアルを思い浮かべた方がわかりやすい。

それぐらい、胡散臭かった。・・・思わず敬語になる位。

「えっとぉ、どちら様でございましょうか？」

「気持ち悪いので、その喋り方止めて下さいませんか？」

「・・・良いけど、自己紹介位しろよ」

「おや、これはスミマセン。私は神です」

「はぁ、そうですか」

コイツ行き成り現れた挙げ句、神って頭沸いてるんだろうか。

・・・良い病院紹介して上げた方が良いだろう。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「えっ？それだけですか？もっとこう、驚いたりしないんですか？」

「へっ？え、え～と。とても痛い人ですね？」

「違います」

「というか、用件は何？何も無いんだったら帰るぞ？」

「貴方が振って来たんでしょう。まぁ、それよりも用件というのは・・・ん？」

「？どうかしたのか？」

「いえ、貴方帰るって何処に帰るんですか？」

「いや、帰るつったら家しか無いだろ」

この男はまた何を言い出すのだろうか。

だが、男は神妙な顔つきをしていた。何かを考える様な。

数十秒位して、男は口を開いた。

俺はこの時、何故だか胸がザワザワとしていた。・・・何かを忘れている様な。

「悠さん」

あれ？俺自己紹介したっけな？

「貴方まさか、気付いて無いんですか？」

「はぁ？何がだよ」

「・・・成る程、やはりか。恐らく事故の時、頭を強く打ち付けたのが原因でしょうね・・・」

何か奴は、一人で理解し、一人で納得していた。

中々言わない男に対して、若干イラついた俺は、少し男に当たる様に聞いた。

「オイ！？一体何だよ！言いたいことがあるならハッキリと言えよ！」

「なら、ハッキリと言わせて貰いましょう。貴方は死んだんです、因幡　悠。」

瞬間、ズキッと頭に杭を打ち込まれたかの様な、痛みが走った。

余りの痛みに、一瞬呻いたが気を取り直して男に言う。

「っ・・・・！・・・・おれが死んだ？冗談は止せよ」

「冗談ではありません。貴方は死ぬ直前、強い衝撃で吹き飛ばされました。・・・恐らく、その時脳に何らかの影響を及ぼして、一時的な記憶障害に陥ってしまったのでしょう。こんな所で、貴方の体質が発動するとは思いませんでしたけど。証拠は、今貴方に走っている激痛が何よりの証です。それにしても、今貴方はかなりの激痛を伴っている筈何ですけどね。それも、常人では発狂しそうな位。貴方本当に人間ですか？」

「・・・人外なら、事故で死ぬなんてマヌケはしないだろ。・・・それに、昔サメに喰われ掛けた時の方が痛かったよ」

そう例のサメ事件の時だ。その時の古傷は、今でも残っている。

「そうですか」

男はそういっただけだった。徐々に激痛と共に戻って来る記憶。

俺は無意識に下・・・命の方へ向いた。男は気遣ってくれたのか、何も言わなかった。

命の傍には姉さんも居た。俺の遺体は運ばれる所だった。

姉さんは泣きじゃくりながら、俺の体に近づこうとしているが、周りの人がそれを無理矢理押し止めていた。

それでも尚、近づこうとしている辺り、弟への愛情の深さが伺える。

命は放心状態でその姿は、昔から命の事を知っている俺からすれば、とても痛々しかった。

・・・だが、そうさせているのは自分なんだ、と思うと胸が痛くなった。

そして、徐々に薄れる視界で、俺は姉さんと命に謝り続けた。

そして叱り飛ばした、誰よりも大切な家族と幼馴染みを泣かせた、自分を――――。

◆◆◆◆

悲鳴。

それに気付き顔を上げると、子供が道路に飛び出していた。

命は驚愕しどうしようかと、オロオロとしていた。

周りもパニックになっていた。

俺はこの光景を知っている。否、見ていた。周りはどよめくだけで、行動しようとしない。

しかし、俺は気が付けば、命の制止を振り切り走り出していた。

あの『夢』とコレが同じなんて確証は無い。だが！トラックは既に迫って来てる。あの夢はもしかしたら俺に子供を助けて欲しいというＳＯＳだったのかも知れない。それにコレは俺の不幸が引き起こしたことかも知れない。

だからこそ！自分の不幸の所為で、誰かが傷付くなんて駄目だ！何より、目の前で人が死にそうなのに、黙って見てられない！

だから、

「間ぁにぃ合ええぇーーーーーー！！！」

キキイィィィ！！！

ドンッ！！！！！

結果的に子供は、歩道へ投げ飛ばす事で助かった。だが、俺は逃げる事が叶わずトラックに弾き飛ばされた。

勢いがあったのだろう。俺は、俺の居た場所から十数メートル飛ばされていた。

俺は、目を開ければ泣きじゃくる命が見えた。だが、視界は真っ赤

に染まっており、徐々に視界が暗くなって来ているのだ。
命が何か言ってるが聞こえない。衝突したとき、耳が逝ったのだろう。
何か喋ろうにも、もう口を開くのも億劫だ。だから一言。
「・・・ゴメンな」
そして、俺の視界が闇に閉ざされた。

◆◆◆◆

目を覚ますと、そこは真っ白な空間だった。
「目が覚めましたか？」
男がいた。
「ああ、スマン。あの時は色々混乱してたからな、迷惑掛けた」
「いえ、構いません。それより気分はどうです？」
「とりあえず記憶は戻った」
「それは重畳。では理解したんですね？」

「ああ、・・・俺は死んだんだな」

まあ、瀕死の重傷を負っていて、ピンピンしてたら人間辞めているとしか思えない。

「ええ、では本題に入りますね。という訳で転生して下さい」

「・・・・はっ？」

「あっ、お望みであれば能力も付けます」

「・・・・えっ？マジで？」

「とりあえず転生したら詳しい事を話すので、能力を決めて下さい」

「ん～、よしっ！じゃあ『身体能力ＭＡＸ』と魔力は・・・上限って在るんだろうか、まいっか『魔力はＳＳＳ』で『二次元、三次元にある技、技術、術、能力を使える』様にしてくれ。ま、こんなもんだろ」

「・・・・・一瞬唖然としてしまいました。とりあえず最後のには制約を付けさせて頂きますね。いきなり使えるのは危ないですから、徐々に使える様にします。それで、容姿はそのままで？イケメンになれますよ？」

「まあタダでくれるとは思っちゃいないからな、それぐらいなら良い。容姿はこのままで・・・ってさりげなく人の事を貶すな」

「おや、バレてしまいましたか。ハハハ、それでは転生の旅へご招

待致します。最初の目的地は、『魔法少女リリカルなのは』の世界へ」

ん？今、コイツ何つった？『なのは』だと？

パカッ♪

俺の真下に穴が・・・。

「ちょっと待てやゴルアァァァ～～～・・・・」

そして、俺は光に飲まれた―――。

プロローグ3（後書き）

やっとプロローグが終わりました？

悠「オイ！？糞作者！最後のアレはなんだ！？」

自重はしません（キリッ

悠「駄目だろ！」

そーゆーお前はどうなんだ？

悠「自重？ナニソレ美味しいの？」

おいおい（^＿^；）

それはさておき、漸く原作に行ける。

悠「なのはだったよな」

ええそうです、最初は。

悠「へっ？最初？次があんの？」

おや悠くん、私は最初に言いました。自重はしません（キリッ。と、

だからなのはが終わっても続きます。

悠「マジかよ・・・」

それに、あくまでもこれはオリジナル・・・詰まり、この先オリストーリーが展開されるのさ。因みに、この小説私の頭の中では完結してるんですよね。（笑）

悠「・・・命、俺生きて帰れるかな」

悠くんの目が虚ろになって来ましたねぇ～。とりあえず、さっさと締めますか。

それでは！次回をお楽しみ下さい！

悠「また、読んでくれよな！」

第1時　リリカルな世界に転生

どうも、皆さん。因幡　悠改め、高町　悠でござんす。

まあ分かるだろうが、なのはの双子の『弟』だ。何故弟なのだろう。俺はそれが腑に落ちない・・・。

それはさておき、今俺は何か赤ちゃん用のベッドで寝てる。隣には、姉であるなのはが健やかに眠っている。これが未来の魔王だと思うと涙が出てきた。

「あら？悠、どうしたのかしら？お腹が減ったんでちゅか？」

そう言い、俺を抱き上げたのは高町　桃子。今の俺の母だ。にしても腹か、大分減ってきたな。

「あー、あう」

クッ、喋れないのが此処まで苦痛だったとは。だが、ちゃんと言いたいことは伝わったようだ。

「ふふ♪そんなに急かさなくても逃げないわよ。・・・はい、どうぞ♪」

ンクッ　ンクッ　プハァ♪

「・・・ゲップ」

おおう、腹いっぱいになったからか眠く・・・。

「あら、お寝んねかしら。ゆっくりとおやすみなさい」

はろー高町　悠2ちゃいでっす☆（キラッ

・・・オェ。

無いな、コレは。ん？展開早過ぎる？ガキの話を聞いて喜ぶ奴が何処にいる。

「・・・悠。明後日の方を見て何をやってる？鍛練を始めるぞ」

「おっけー、きょうにぃ！」

さて、今日も鍛練頑張りますか。

恭兄との鍛練を終えた俺は海鳴市のとある山に来ていた。

まあぶっちゃけA' sでなのはが訓練していた場所何だがね。散歩

してた時、偶然この場所を見つけた時の感動は例えようも無い。
えっ？そんなとこに何しに来たのかって？そんなの決まってるじゃないか、能力の確認さ！
「という訳で、とりあえず一人でやれる所までやってみますか！ったく、あんの糞神説明するとかほざきながら連絡ひとつ寄越さない！」
ふぅ、まずはＦａｔｅかな？・・・余り高いランクの物は駄目だから、実践的で真っ先に思い付くのは、干将・莫耶ぐらいしか無いな。ま、実践あるのみだな！
「投影　開始（トレース・オン）」
・・・。
・・・・・。
・・・・・・・・。
アレ？何も起こらない？何故？？？あっ！？よーく考えてみたら、俺は実物を『識らない』。
確かに、原作をプレイしたからどんなモノか知っている。だが、『外側』を知っていても『中身』を識らなければ、意味が無い！
例えるなら・・・豊臣秀吉という名前を知っているが何をしたか、という知識が無いのと同義だ。

いや、それ以前に・・・魔力が出せ無ければどんな能力を持っていても、宝の持ち腐れもいいところだ。

魔力何てどうやって出すんだよ。こちとら一般人だぞ。魔法の事何てちんぷんかんぷんだ。

・・・いや、魔法の事以前に俺は勉強の類いの物が、苦手だったりする。その所為か学校では赤点の常連だった。

何せ・・・小学校の問題ですら、解けないのだから・・・。

えっ？良く高校に入れたなって？うん・・・まぁ、命に迷惑掛けたなぁって思うよ。それ以外はノーコメントで・・・ってまぁ、ただ単にテスト当日の前後の記憶が曖昧だから何だけどね。

そういう訳で、俺は考えるのは苦手だったりする。オタク知識なら沢山あるんだけどねぇ、やはり指導者が必要だよな。

仕方ない。今日の所は普通に身体の鍛練だけに留めておくか。

――そう思った時だった。

ドクンッ、心臓が跳ね上がる。倒れ込みそうになるのを踏ん張り、片膝を着く。

（何だ？）

そう思ったのも束の間、目に痛みが走り、世界が色を失う。

そして直接映像が眼に焼き付けられた。

その場所は人通りの少ない住宅街の様であった。そこにポツンと一軒屋―骨董屋だろうか？―が建っていた。

そこで映像が途切れる。

気が付けば汗が大量に滲み出ていた。息も途切れ途切れで、全力疾走した後の様な脱力感。

何よりも気になるのは先の映像・・・いや、映像と言うより寧ろ直接この目で見ていた様な感覚。

（今のは一体？いや、それよりもさっきの場所は）

俺は先の光景を見たことがあった。以前、散歩した時通ったのだ。

その時は店を見た時、珍しい物でも置いてるのかな？程度の認識だったが、俺は何か在るんじゃないのかと思い、その店に行ってみることにした。

高町家が経営する喫茶『翠屋』。そこから、然程離れてない場所にそれはあった。

―宝具『運命の夜』。

何の冗談かと言いたい。最初に目に付いたのは、そうデカデカと書かれた看板だった。

前に来たときに何故気づかなかったのだろうか？普通に見る人が見れば、なんでやねんとツッコミたくなるような、そんな看板。認識阻害の魔術でも掛けられているのだろうか。

そんな風に、ボー然と看板を見ていた俺の視界に映ったのは、店先に出されている机、その上に有る指輪だった。

気が付けば俺はそれを手にとっていた。指輪は白く何の装飾もない。だが、俺は何か違う、そう思った。

それは正解だった様で、

『アンタが因幡悠か？』

突然喋ったのだった。そう、喋ったのだがそれ以上に何故俺の名前を知っているのか、そして俺の前世？の苗字を知っているのか、という驚きだった。

「・・・確かに俺が悠だが何で知っている？」

『あん？神から何も聞いてねぇのか？』

神・・・。思い当たる人物が一人だけいる。とりあえず指輪の言葉に頷いた。

「それを聞く前に送られたからな」

『・・・ちっ。アンの糞神』

何だろう。彼（便宜上、男性人格っぽいのでそう標記して置こう）

とは気が合いそうだ。

「とりあえず良いか？」

『ん？』

「場所変えさせて貰っても。流石に物に話し掛けてる痛い子には見られたく無いからさ」

『ハハハ！そんくらい良いぜ。その為にまず買ってくれや』

はっ？

「お前売り物だったのかよ！？」

『まーな！』

「何でそんな偉そう！？」

コイツ、メンド臭ぇ・・・。

『オラ、さっさと買いな』

クッ、さっさと買ってしまうか。・・・金あったかな。

そう思いつつ、店に入る。

「はっ？はぁ！？」

二度目の驚愕。思えば店の看板を見た時に気付くべきだったのかも

しれない。

所狭しと並べられた。剣、斧、槍等々。コレだけなら単に凄いで片付けられたかもしれない。しかしそこにあったのは、数々の宝具。ちらっと見るだけで、知る人ぞ知る、エクスカリバー、ゲイボルグ、乖離剣エア、って何でエアが在るんだよ！？

俺は驚きを通り越し、当初の目的も忘れて、店の出口で茫然としていた。

第1時　リリカルな世界に転生（後書き）

悠「やっちまったな」

やっちまったぜ・・・

悠「何がしたいんだお前は」

グッ！だがこの小説は『知（識）る事』に重点を置いてくから良いんだよ

悠「ハッ！そうかい」

なんか鼻で笑われたし……

悠「んじゃ、次回の『時を識る者』は――」

ちょっ、スルー！？（バキッ

悠「黙れ」（ニコッ

…いえっさー

悠「…気を取り直して。

次回の『時を識る者』は！

突然の事に驚いた俺、そこに店長が現れて……！？

第二時　俺の不幸は転生しても消えない

「…そんなバカな」

次回もまた読んでくれよな！」

…次回短くなるけど（メキョッ

……っ！？（バタバタッ

悠「気合いだ」

待って！？まだ何も「どうせまた遅くなるとかそんなんだろ」何故分かるし…

悠「……」

えっ！？ちょっとソレはまだ使えな――――！？

悠「それじゃ、読者諸君。次回のあとがきで会おうぜ！」

感想受け付けてま――ぎゃあああああああああ！！！

第2時　俺の不幸は転生しても消えない

「やぁやぁ、こんな辺鄙な店にお客さんかえ？」

突然聞こえてきた声で、俺は我に返り、声のした方へ振り向く。

「えっと・・・、おばあちゃんは一体？」

「ホッホ、わしか？わしゃこのただの店でただの店長をやっとるただのおばあちゃんじゃよ、ホッホッホ」

何処がだっ。

「して、何か用かいのう？」

おっと、余りのショックに本来の目的を忘れる所だった。

「この指輪が欲しいんだけど―」

「この聖剣をやろう」

「いやいらない。それよりもこの―」

「ではこの絶対必中の槍をやろう」

「いらないって。それよりこの指輪―」

「ならばこの大英雄の斧剣をやろう」

「だからいらねぇつってんだろっ。っていうか何でこんな所に宝具なんざあるんだよ！？」

「……此処にあるものは皆あの人が持って来たものなんじゃよ」

「あの人？」

「そう、あの人はいつも朗らかに笑う人じゃった。あの人はわしの憧れの人での、昔っから色んなものを拾って来よった。その度に、また拾って来てしまった、と笑うんじゃ。そんな所にわしは惚れ込んでしまったのじゃがな」

何だろう？この婆さん、行き成り語り出した挙げ句、シリアスっぽい雰囲気になってきたぞ。……どうしよう。止めるべきか？

「……じゃが、ある日のことじゃった。些細な事で喧嘩をしてしまっての、その途中心臓の発作でぽっくりと逝ってもうた。わしはあの時の事を今でも後悔しておる。そして、あの人にあの時の事を謝りたい」

……此処はどう返すべきか。

「はい、ワロスワロスｗｗｗ」

「ホッホ、そういってくれたのは坊やだけじゃ、ありがとうの」

「いや、他の人言ってたら駄目だろ。つかありがとうって言われても困るんだけど」

一体どう聞き間違えたらこんな返答になるんだ？

「そうじゃな。後悔するぐらいじゃったら、最初から喧嘩なぞしなければ良かったの」

ってオイ!?

「ちょっと待てやクソババア!俺、後悔のこの字も言って無いからな!?」

この婆さん耳腐ってやがるな。

「ホッホ。そんなに謝りたいのなら墓の前で謝り倒してこい、そうすれば天にいる爺さんにも届くだろ、か。そうじゃな、そうすればあの人も許してくれるじゃろうな」

一　言　も　言　っ　て　無　い　！　！

「……不幸だ。もうやだ……」

「ホッホ、話しを聞いてくれた坊やにはその指輪をタダでやろう」

「いいのか?後から返せと言われても返さんぞ」

「ホッホ、もうお行き。此処は危ないからの、君みたいな子供が来るのはまだ早い」

「今更!?此処に来た時点で言えよ!はぁ、もういいや。じゃあな婆さん。もう会うこともないだろう」

「……そうじゃな、坊やも元気でな」

何か色々と腑に落ちないが、とりあえず指輪を持ってさっきの場所へ戻る。

ふっふっふ、此処から俺の最強の時代が始まるのだ！！

余談だが、上機嫌に蹴った石ころがカラスに当たり、何処に居たのかというカラスの大群に追い掛けられ、その途中寝ていた犬の尻尾を踏ん付けて更に追い掛けられた。あそこに着いたときには、ボロボロだった。

……これじゃあ最強じゃなくて最強（笑）じゃねぇかよ……ちくしょう……グスンッ

第2時　俺の不幸は転生しても消えない（後書き）

……（屍）

悠「言葉も無い、か。当然だな」

……ち、違っ……コレはお前が―――（ゴッ　ベキッ　ドゴッ　ピクピク

悠「例え、神様仏様読者様が許しても、オレハオマエヲユルサナイ……」（般若

……（屍？）（ビクンッビクンッ

悠「さて！読者の皆様方。見苦しい所を見せて済みませんでした。では、次回予告です。

因幡　悠、もとい高町　悠は早速指輪の指導の元、魔力の解放を行った。

だがしかし、指輪に魔力は扱えても指輪の力を振るうまでの才能が無い、と言われて落ち込む悠。

そんな悠が取った行動とは……！？

次回第3時　こいつが俺のデバイスだ！

「……お前が何と言おうとも、俺がお前のマスターになるんだよ！！！」

という訳で次回もお楽しみに！！」

……（屍）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4253u/

時を識る者

2011年10月26日09時15分発行